
死神少女は笑わない

KOH SAWAKURA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神少女は笑わない

【Nコード】

N8106X

【作者名】

KOH SAWAKURA

【あらすじ】

“ 生きているのがもう嫌だ ”

昔から根暗で人と向き合うことを嫌っていた俺こと天城 翼あまぎ つばは、多額の借金を抱えていた両親にも病気で先立たれ、高校も中退して借金取りから逃げ回っている日々。

とりあえず生命保険が下りて多額の借金は返済できたのだが、何も出来ない俺が一人生きていけるはずもなく、生きることが苦痛にな

つて五階建てのビルの屋上から飛び降り自殺を謀る……

はずだったのだが、飛び降りたのは良いものの、着地地点は車のボンネット。

他人事だと思っていたが、人はなかなか死のうと思ってても死ねないものだ。

運よく左腕複雑骨折だけで済んだが、それとは別に“余計なモノ”まで見えるようになってしまった。

人の死期……生きとし生ける者に迫る死の瞬間が、“映像”としてハッキリと見えるようになってしまった。

それからというものの、不吉なことに映像が見える度に俺の周りでは人がどんどん死んでいく。

そんなことに気付くはずもない俺は何食わぬ顔で日常を送っていたのだが、飛び降り自殺を謀ろうとしたビルの前でなぜか“隕石”に襲われる。

まあ、それも“隕石”ではなく、人の命を狩る“死神”と呼ばれる“女の子”の“尻”だったのだが……

一難去ってまた一難あり。

その言葉通り、偶然出会ってしまった“死神の眼を持つ怪物少年”と“成りそこないの死神少女”のとても奇妙な日常生活が始まるのであった。

第1葬・死神少女と怪物少年

もう死んでも良いと俺は思っていた。

三千万円という多額の借金を抱えたまま、病気で死んだ両親の肩代わりをし、ヤクザのような恐持ての取立人から命からがら逃げ回る日々。

生命保険が適用されて手元に来た三千万円で借金は完済したものの、残ったのは何もなく、何も出来ない俺が一人生きていけるはずもない。

金もなければ、食うものも無い。

ただただひもじいだけ。

もう生きる気さえありやしない。

というわけで散々なこの世からオサラバしようと、いざ五階建てのビルの屋上へ。

もちろん、誰も止めてくれる人も、心配してくれる人もいない。

フェンスをよじ登り、僅かな梁の上に立つ。

清々しいぐらいに涼しい風が、俺の頬を撫でる。

未練も何も無い。

怖くも無いし、もうそんなだっでどうでもいい。

俺はゆっくりと前に身体を傾け、ビルから身体を投げ捨てた……

ズドガァン！！！！

はずだった。

あれ？グシャツと逝くんじゃなかったっけ？

人っていうものはとても厄介なもので、死にたいと思っても死にきれない事がある。

それは俺も例外ではなく、予想外な事にアスファルトに思い切り身を打ち付けるかと思いきやたまたま真下にあった車のボンネットの上にノーロープバンジー。

案の定、左腕を下に着地したため、とても不愉快な音と激痛が走り、白い骨が肉と皮膚を突き破って外に出ていた。

左半身は血まみれ、他人様の車の上で不様に死にかけている。

身体や頭も落ちた衝撃に耐え切れず、クラクラと強烈な目眩と吐き気を引き起こす。

一体どれくらいぼんやりしていたらろうか、遠退いていく意識の中、ハッキリと聞こえたのは救急車のサイレンの音だけだった。

此処は地獄か、はたまた天国か……

答えはどちらでも無いらしい。

ハッキリとしない意識の中、俺はゆっくりと目を開けた。

俺、どうやらこうやら生きているらしい。

もしかして、自分の名前を忘れてるなんてオチはないよな。

俺は天城あまき翼つばさ。

とってもツイていない少年です。

よし、覚えてる。

ゆっくり上半身を起こすと左腕にはギブス、右腕には点滴のハリが突き刺さっていた。

……すっげえ痛い。

痛いのもそうだけど、まともに見てられないな。
点滴ってのは。

しかしながら、神様も意地悪だよな。

コッチは今すぐ死にたいってのに、不ざまな生かし方しやがって。
いつそのこと、果物ナイフで首を斬っちまうか？

なんて考えてみるも、そんな余力はもう尽きているらしいし、果物
ナイフなんてどこにも無い。

はあ……まだまだ生きろって事か。
生きるのが苦痛なのにな。

と、前のベッドに寝たきりのおじいさんを見た時だった。

ジ、ジジジ、ジ……

と古い映写機が映像を映すかのように突然目の前に別なビジョンが映し出される。

な、何だよ一体……

そこにはベッドに伏し、苦悶の表情を浮かべて喉を掻きむしる男の姿が見えた。

そして次の瞬間、男はぐったりと倒れ込み、静かに息を引き取った。その男は、前のベッドに横たわる、あのおじいさんだったのだ。

「——っ!!」

俺は咄嗟に目を閉じると、辺りは何もなかったように元通りの景色だった。

何だよ、薄気味悪い!!

と、頭を右手で掻きむしる俺。

今のは悪い夢だ。

寝てただけだ、落ち着けよ。

自分自身をなだめていると、若い男の医師が入って来た。

話によると俺の主治医だそうだ。

なんと奇跡的に左腕複雑骨折と栄養失調で済んだそうだが、念のためにも頭もCTスキャンを取って検査するらしい。

なんて丈夫な身体なんだよ、と内心、文句を垂れる。

全治4ヶ月だと。

これじゃ、相当ヒマになるね。

そんなこんなで4ヶ月の入院生活はあっという間に過ぎ、退院して間もなく生活保護の金も入らなくなるといふことで何でも屋を開業

した頃だった。

目眩程度に考えていた不可解な“あのビジョン”はごく稀に起こすけど最近はおこる回数が大幅に減った。

が、今は信じられない事がたびたびあった。

俺の目の前のベッドのおじいさん、あれを見た翌日に突然、呼吸困難を引き起こして死んでしまった。

その時はまだ偶然だろうと思っていたが、ビジョンで見た人は全員、その翌日か翌々日に容態が悪化して死んでいる。

最近思うようになったのだが、俺の目は人の“死”を予知する力があるのだろうか。

今だに信じられ無いが、多分、なんらかの意味はあるのだろう。

それはそれでおいといて、今とても重要なこと。

それは住居だ。

住む家も無い、部屋を借りるなら金がいる。

その金はあるのだが、収入が不定期なため心許ない。

どうしたものか……

途方に暮れながら一人歩いていると、俺が飛び降り自殺しかけた五階建てのビルの前に出る。

ふと、見上げると物凄い勢いで何かが落ちてきていた。

俺へ向かって。

（あ、ちょうどいいや。あれにぶつかって死のうか……）

なんて考えてばーっとそれを見上げているとさらに驚く事があった。

（え、女の子！？）

身を引こうか、とまで考えたのだがそしたら女の子が死んじまう。

自分の事は何でもいい、この際、身を呈して庇うのが道理。

さあ、一思いに殺^やつてくれ！！

バゴンッ！！

「ぐえっ！！」

身構えた俺の顔面に当たったのは、女の子の凄く柔らかい尻。

なのだが、あまりにもすごい衝撃でそのまま転倒して後頭部を強打、見事に女の子の尻に敷かれてしまう。

アスファルトに後頭部が減り込んで……

これは夢だろうか……

顔の上に大変なモノがある。

肉々しい感触があるからには夢では無いだろう。

（は、早くどけてくれよ……）

甘ったるい、女の子の子したニオイが次第に俺の理性を奪っていく。

ヤバイヤバイヤバイ！！

無理矢理、頭を引いて危機を脱するが後頭部がジンジンと痛む。

一方、黒いワンピースを着た背丈の小さい女の子はと言うと……

ピクリとも動かない。

し、死んでないよな……？

ぐうっぐうっぐうっ……

と間拔けな音が路上に響く。

……はあ？

「お、お腹が空いたですう……」

「え！？」

な、何なんだよ……一体……。

第2葬・識りたがりの死神姫と死にたがりの道化師

で、そのあと。

腹が減って動けなくなった少女を背負いながら、たまたま近くにあったコンビ二へ足を運ぶ。

雪のような白い肌に亜麻色のロングヘアー。

幼さが残る童顔に可愛らしい大きな目、ルビーのように紅い瞳。

小柄で華奢な体つきとは裏腹にファッションモデルのような絶妙なスタイル。

細く伸びる脚線美に、形は小さいがなかなか質量のある胸、見事な腰のくびれ。

見たカンジ、その辺を歩いていたらスカウトされそうな美少女だが、ちよつと変だ。

体は切り傷や打ち身といった傷だらけで、着ている大層高そうな黒いワンピースもボロボロ。

本人もとても憔悴し切っていて、身動きすら出来ないのだろう。まず、考えてみる。

あんな格好で外を歩いてるなんて明らかにおかしい。変な奴らに襲われた、とかは普通過ぎるし。

そもそも空から降って来る自体、おかしすぎるよな。

詮索はさせておき、まずはメシだ。

コンビ二の休憩室の椅子に彼女を座らせて着ていた上着を被せると、俺はカップヌードルを手にレジに並んで購入する。

休憩室にあったポットからお湯を注ぎ、へたばる彼女の前に差し出す。

「何ですかぁ？これは？」

物珍しそうに差し出されたカップヌードルの容器を見つめていう彼女。

不思議だなあ。

今の世代でカップヌードルを知らない子がいるなんて。

「カップヌードルっていうラーメンだ。普通の食べ物だよ」

「……毒とか、入ってませんよね？」

「んな馬鹿な。有害なモノは何一つ入ってない。だから安心して食べ」

「そ、そうですか……。なら遠慮なくいただきます」

「召し上がれ」

薄々、箸も使えないだろうと予測していた俺は気を利かせて箸の代わりにフォークを取り出す。

すると彼女は静かにフォークを手に取り、それへ巻き付けると熱いのかフーフーと冷ましながらゆっくりと口へ運ぶ。

「——！？」

「どうした？」

「お、お……」

「お？」

「美味しいっ！！」

ガクン！！

と、テーブルについていた肘が下に落ちる。

何だよ、ビックリさせやがって……

なんて肘を着き直して横目で彼女を見る俺。

とりあえず名前とか聞いておこうか。

知らないと呼びづらいし。

「ねえ？君の名前はなんて言うの？」

「私の？私はアスカ・ト・サイサリスと申します。呼びづらいだろうからアスカって呼んで下さい」

「アスカ……か。外人みたいな名前だな。ああ、見た目のまんまか。分かった。俺は天城 翼っていうんだ。ま、よろしくね」

「アマキ ツバサ……。ツバサ様ですね、よろしくお願いします」

俺の名前を不自然に呟いた後、ニコツと笑顔で俺に丁寧に挨拶をするアスカ。

そんなに珍しい名前か、なんて思いつつも先程の件について聞いてみる。

この子に何か大変なことが起きてるんじゃないか……？別に心配しているつもりは無いが、気になるので何気なく聞いてみる。

「そのボロボロの服と傷、どうしたの？」

「あ、これ……ですか？これはその……」

「……答えたく無いなら別に答えなくてもいいよ。気になったから聞いただけだ」

「そ、そうですか。すみません。わざわざこんな美味しいモノを御馳走になってまで……」

「気にしないでいいよ。誰も手を貸してくれるような雰囲気じゃなかったし。こっちはあくまでも最低限、必要な事に手を貸してあげただけさ」

と視線を逸らしながら言う俺。

俺は彼女があまりにも不自然だったし、空から降って来るなんて論外だろ、フツー。

それに巷の人気漫画やアニメで『突然、空から女の子が降って来る』なんて展開は大概、普通じゃ無い事に巻き込まれるってジंकスが

あるし。

「そうですか！！助けて頂いてありがとうございます♪おかげさまで元気になりました！！」

「そりゃあ良かった。で、見たカンジ、身寄りとかお金がなさそうだけど……今晚、泊まる場所は？さすがに野宿じゃ無いよね？」

「う……無いです。すみません」

「……なんか深い訳がありそうだ。差し支え無ければ話してみな。俺で良かったら相談に乗って上げるよ」

「そ、それはダメです！！そんな事したらツバサ様にも危険が及びます……！」

「危険……か。上等だよ。俺は……いつだって死ねる身さ。今からだってそのフオークで首筋をブツ刺してすぐに死ねるよ。もう俺には“生きてる理由”なんて無いから」

俺の身を案じて訳を話さずにいたらしいが、この台詞を聞いて拍子抜けしたらしく、ゆっくりとカップヌードルのカップをテーブルに置いてア然とした表情で俺を見るアス力。

「“生きてる理由”がない……？」

「そうだよ。親に苦労させられて生き抜いたけど、結局それは俺を一人にするって言う結果を生み出した。頼れる人もいない。身寄りのない。たった一人で生きて行くのがすごい苦痛だった。明日はどうなるかって、考えるのがすごい怖かった。それが嫌になって死のうとしたんだ。だけどこの通り、生かされちゃった。こんなもぬけの殻みたいな俺に、生きてる意味とか理由なんてないだろ」

「……」

「だからさ。所詮、ゴミ同然の俺の命なんてどうでもいいんだ。でも、せめて人のために命を張って死ねるならそれでもいい。親に恵まれなかった子の、恵まれた死に方にはそれがお似合いだよ」

「……何でそんなに死にたいんですか？せつかく親から授かった命を粗末にして、死にたいですって？そんなの言語道断です！！私は今を全力で生きたい！！生きてもつと色んな事を識りたい！！私が今まで知らなかった事をもつと識りたい。私は死にたいなんて考えられません。貴方の考えは間違っています。改めてはどうですか？」
「……はあ。こんな事を話したってつまらないだけだ。それより話題を変え——」

初対面のアスカといきなり言い争いになりそうになったので、とりあえず話題を変えようとした時だった。
凄まじい音と共に、休憩室を囲む硝子が割れて飛び散った。

ヒュンツ！！ズドオツ！！

咄嗟にアスカと一緒にテーブルの下に潜り込んだ俺。
先程まで頭があったところを、凄まじい早さで何かが通過して行った。

恐る恐る、その何かの後を追って静かに視線を向ける。
その先には、毒々しい模様の巨大な槍が二本、壁に深々と突き刺さっていた。

な、何だよ一体！？

「ツバサ様！！お怪我はありませんか？」

テーブルの下で屈むアスカは小声で話し掛ける。
俺は何が起きたのか状況が掴めないまま、とりあえず頷いて答える。

「はぐれ死神――。敵です。戦闘になる前に一度逃げましょう!!」
「はア!? 何がだよ!? さっぱり状況が――」

「狙われているんです。私達が。状況が悪化しないうちに、人がいない場所へ逃げましょう!! ここで戦闘になったら他者を巻き込んで大変な事になります!!」

「わ、わかった!! 急いでテーブルの下から出る!! 走るぞ!!」
「――!? 危ないっ!!」

ドスッ!!

テーブルの下から出ようとした瞬間、テーブルを先程の槍が貫く。俺はアスカの声で、テーブルの下から飛び出る。

アスカも咄嗟に身を翻して飛び出る。
するとテーブルの上には……。

肩まで伸ばした茶髪を靡かせ、切れ長の瞳は、左が黒、右が赤のオッドアイ。

黒いコートを着た少女が槍を構えて立っていた。

まるで凍りのように冷たい視線が、俺の身体を縛り付ける。

身体の奥から込み上げて来る恐怖と、言いようの無い殺気を感じた俺は微動だにできなかった。

畜生、次から次へと一体何だよ!!

彼女はこんな状況にも動じず、表情一つ変えずに壁に突き刺さっていた槍を左手で軽々と抜き放つ。

そして無表情のまま、彼女はゆっくりとその切っ先を俺の心臓へと向ける。

そ、そうか。

「まさかな……俺を殺し（迎え）に来たってのか……。ははっ。何だ？ ボサツと突っ立って無いでやれよ？ 死神って呼ばれるお前なら心臓に一突きだろ？」

「……………」

無表情のまま、違う違うと言わんばかりに彼女は首を横に振る。
な、何だ……？

狙いは俺じゃ無いのかよ？

んじゃ誰が……

と彼女の視線を向けた先を辿ると、そこにいたのは壁に寄り掛かる
アス力だった。

二本の槍を握る彼女はゆっくりと歩み寄り、槍の先に怯えつつも身
構えるアス力。

おいおい……そういう事だったのか！！

だったら何でハッキリ言わないんだよ！！

「アス力！！」

「ツバサ様！！来ないで！！これは“死神”と“死神”の戦いです
！！死神でない貴方には勝ち目はありません！！私が此処からおび
き出しますから、その隙に逃げてください！！」

「……バツカヤロー。こんなに後味悪い逃げ方出来るかよ……！！」
「良いんです……私は貴方みたいな優しい人に巡り会えてよかった。
でも、私が求めている“マスター”ではなかったようです。これ以上
逃げるのは嫌なので、此処で果てようと思います……！！」

……くそっ！！

こんな時に何をしてんだよ俺！！

どうせこれっぽっちの命なんだろう？

アイツを助けてやるぐらいマシな最後はねえじゃねえか！！
ゆっくりと冷酷な彼女は槍の先を、アス力の心臓へと向ける。

アス力は覚悟したのか、静かに瞼を閉じた。

クッ、と身体を引き、捻りの勢いを使って槍を突く。

……間に合え、こなくそおっ！！

ズガッ！！

何かに突き刺さる音がすると同時に、ビシュ、と宙に飛散する真っ赤な液体。

ポタタタ、と床にまで滴り落ちる。

それは目を閉じていたアスカの綺麗な顔にも付着する
あはは、見てみやがれよ。

——俺の、鳩尾から“槍”の先っぽが見事に突き出したら。

第3葬・契約と死神武装（前編）

ヒタヒタと俺の体を伝わってタイルに滴り落ちる大量の血液。

痛みは激痛の限界を超え、もはや何も感じないに等しい。

貫いた傷口からは、赤々とした液体が止まることなく延々と吹き出している。

気管を貫かれた、といっても良いのか……

はは、どうりで息ができないわけだ。

おまけに内側で出血した血液が気管を逆流して、口からもガラガラと出てきやがった。

今、凄い酷い顔だろうな。

多分、後ろから思い切り、背中をあの槍で突き刺したんだろう。

殺るなら一思いに心臓をぶち抜けて。

これじゃ、また死に損なっちゃったってことじゃないか。

「ッ、ツバサ様ッ……！？」

「はは……また死に損なっちゃった……神様も大層意地悪だよな。

……ほら、ボサッとしてないで早く逃げろよ……殺さ……ゴフッ」

「もう喋らないで下さい！！これ以上、喋ったら死んじやいます！！」

「バカヤロー。死ぬのが、今の俺の望みさ。……早く逃げろ……奴の気が逸れてるうちに！！」

「……で、でも……！！」

その瞬間、彼女は厄介そうに顔をしかめると俺が突き刺さった槍をそのまま片手で持ち上げ、先程壊した窓から俺を外へ強引に放り投げる。

軽々と持ち上げられ、放り投げられた俺は暴れることもなく、ただ

ただ投げ捨てられたゴミのように宙を舞って、固いアスファルトに身を打ち付けた。

ドサッ。

でも、もう痛くもなんともない。

風も音も、痛みも感触も全く感じない。

動くことも、何も出来ない。

ただ、それは氷のように凍てついた冷たさだった。

血液が流出していくにしたがって、次第に目の前さえも霞んできた。

俺はようやく死ねるのか……。

もうこれだけ出血していれば、助かる見込みはない。

これで人生終了、だ。

ココデ オワラセテ イイノカ？

何をいまさら。良いに決まってる。

オワッテ イイノカ？

ああ、もちろん。

オマエニ シヌコトハ ユルサレナイ

は？もうすぐに死ぬだろ俺？

オマエハ モウ アタラシイ スタートニイル

……何をふざけたことを！！

トキハ ミチタ パンドラ ノ カギ ヨ

イマヨリ ココニ ケイヤク ヲ ムスブ

ナンジハ カギ ト ナリ ハメツ ヲ ハライ

クルベキ タタカイニ ムケテ カクセイセヨ

とわけの分からない言葉が終わると、突然、まばゆい光に目を遮られた。

ゆっくりと閉じたはずのまぶたを開けると、そこにはアスカの顔があった。

辺りの景色はもうすっかり夜だった。

……あれ？

俺は死んだんじゃ……

「——ッ！？」

突如、アスカの唇が俺の唇と重なった。

肉厚で柔らかいアスカの唇。

見た目とは違った感覚に、戸惑う俺。

すると次第に身体が火照ってくる。

身体の芯から沸き立つ、熱い感覚。

それと同時に、黒い稲妻と赤い稲妻が俺の身体を駆け巡り、鳩尾に開いたはずの穴が閉じていく。

ゆっくりと身体感覚が戻ってくる。

何なんだよ、一体……。

「やっと…… やつと見付けました♪ 私だけの御主人様♪」
マスター

と安堵した表情で寝たきりの俺に声を掛けるアス力。
俺が険しい顔を見ると、真面目な表情になって俺を見るアス力。

「な、何なんだよ……」

「ツバサ様。一緒に戦いましょう。あの死神を倒すために」

「…… 全く状況が読めないんだか……」

「あ。簡単に説明しますと、私はツバサ様と“契約”しました♪ よつて今から私は貴方様の死神です♪」

「死神……？ つーか契約ってなん…… ツー!!」

と話している最中。

ヒュオッ!!

風を切るように槍を突き出し、月下の中で攻撃を仕掛けてくる寡黙な少女。

俺は咄嗟に身体を捻り、突き出された槍を脇で挟みながら押さえ込むと、そのまま両手で槍を握って後ろへぶん投げる。

彼女の身体は軽々と持ち上げられ、ぶん投げられてアスファルトに思い切り転倒する。

…… 運動オンチな俺ってこんなこと出来たっけか？

「ナイスカウンターです!! ツバサ様!! 相手も“死神武装”してますし、私達も武装しちゃいましょう!!」

「んなこと言われてもよ…… 何が何だかさっぱり分からん!!」

「良いから!! まず私が手本を見せます。良く見ておいってくださいね!!」

そういうとアス力は何やら呪文みたいなモノを呟いた。

「s i c h b e w a f f n e n（武装展開）！！」

するとアスカの前に巨大な魔法陣が浮かび上がり、それがアスカをすり抜けると今まで着ていた黒いワンピースが黒い燐光を振り撒きながら光り輝き、露出部が多く赤い模様が入った真っ黒いフルプレートが現れる。

亜麻色のストレートヘアーをポニーテールにし、黒々しく輝く額当てをしている。

両手にはまさに死神のイメージにピッタリな巨大な鎌が二本、握られていた。

俺はただただ、現実離れたその光景を啞然として見ているしかなかった。

「死神武装！！双鎌華斬！！」
そっれんかさん

ヒュンヒュン、と両手に握る鎌を器用に回転させ、何やらちゃっかりキメポーズを取るアスカ。

それを見た俺は苦笑いを浮かべる。

「……す、すげえ」

「さ、早くマスターも武装してください！！でないと戦えません！！」

「え？俺も？」

「はい！！早くしてください！！」

「っていわれてもなあ……」

さすがに俺はどうなっているのか理解できずに困惑していた。

その時、オッドアイの彼女はゆっくりと立ち上がり、驚いたようにアスカを見る。

「……双鎌華斬……。……所詮、三流死神。……私を侮るな……」

二本の槍を構えると、シュツ。

まるで瞬間移動したのかと思わせる速さでアスカを間合いに捉えた。
ヒュオツ、ギンツ！！

槍を思い切り突き出すが、素早く横に薙ぎ払われたアスカの鎌で矛
先を反らされる。

アスカはそのまま横に一回転し、もう一方に握る鎌で再度薙ぎ払う。
ヒュオツ、ガキンツ！！

彼女は咄嗟に鎌の刃を槍の柄で受けるが、激しい火花を散らして大
きく後退する。

驚愕の表情を浮かべる彼女へ、アスカはとめどなく間合いを詰めて
追撃をする。

ガキンツガキンツガキンツ！！

刃が１メートル以上、柄の長さは１メートル５０センチぐらいある
大きな鎌を、まるでその辺に落ちている棒切れを振り回すような有
り得ない速さで鎌を操るアスカ。

そんなアスカの鎌戟を受けるのがやつとの彼女。

明らかに、コッチが優勢だ。

俺が加勢する理由が他に無い。

ジ、ジジジ……

突然、目の前の光景がセピアになる。

そして、攻めていたはずのアスカが、突如、凄まじい光を放って突
進して来る彼女の槍に身体を貫かれる、そんな残酷な映像が映し出
される。

な、なんで今頃こんな事が……？

不思議に思った俺はあることに気が付く。

この映像が見えた、と言うことは……まさかっ！？

「どうしたのはぐれ死神さん？さっきから逃げてるようですけど？」
「……」

「まさか、ビビってるのか？」

と、その瞬間。

ニヤリと彼女の口元が緩む。

突如、彼女が握っていた二本の槍が一つの長い槍になり――

ゆっくりと矛先をアスカへ向け、突く構えを取ると、矛先がまばゆい光を放ち始めた。

アスカはあまりにも眩しかったのか、咄嗟に目を覆う。

しまった……！！

恐れていた事が現実になっちまいがった。

「アスカ！！逃げ――」

俺は全力で叫んだ。

しかし、凄まじい音叉のような高い音が聴覚を遮っている。
次第に矛先へ収縮していく光。

辺りの風を巻き込み、ドリルのような尖端がすぐに現れた。

『神々を（ロン）――！！』

彼女は呟きながらゆっくりと身を捻ると――

――射殺す真髓の槍ギヌス！！』

彼女の叫び声とともにそのドリルのような、
尖端に風を纏った槍を
突き放った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8106x/>

死神少女は笑わない

2011年11月15日16時08分発行